
このこねこのこ

加村由

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「このねこのこ」

【著者名】

「2000」

【作者名】

加村由

【あらすじ】

異世界トリップしてネコになってしまった男の子と、その拾い主のお話。

1・ねこ、拾われる（一）

おれの家では猫を一匹飼っている。

灰色の虎模様の、ちょっとでっぷりしたきまぐれなオス猫で、おれが学校から帰つてくるとソファで丸くなつてしたり、たまにおれが扉を開けるのを玄関で待つてたりする。

お腹が空いているのに食皿に餌が入つていないと、わざわざおれのところまで来て「にゃあ」と鳴いて催促する。機嫌がいい時はごろごろと喉を鳴らしながら体を擦りつけてくるし、かと思えば首を搔いてやううと伸びした手に爪を立てられたこともある。

休みの日、父さんが畳に横になつて新聞を読んだいると、ご丁寧に広がった新聞のど真ん中にきて、じろりと横になる。母さんは最近、「やめよう」「やめよう」という言葉を覚えさせようと一人画策している。お陰で、ついのだれかが冷蔵庫の前に立つと尻尾を立たせて近寄るよになつた。

そんな姿を見ていると、猫ってなんて自由な生き物なんだううと思つ。特に、テスト期間中にたじたじになつて帰宅したときや、マラソン大会の前日なんかに、目の前でのんびりあくびなんてされた日には、ちょっとした殺意すら湧く。

猫になれたらいいだろうなあ。猫になりたいなあ。本当に猫になつてしまつたら、発売日にマンガを買いに行くことも、友達と海やスキーに遊びに行くこともできなくなることなんか棚に上げて、眞剣にそう思う。

だから、といふわけではないだうと信じたい。それとこれとは無関係であるとはが非でも信じたい。そうじやなきや、おれは過去に遡つて、一瞬でも「猫になりたい」と思つたあの時とその時との時の自分をぶん殴つてこなきやいけない。

だから、でも、じやあ一体どうしてこんなことになつたんだ？

*

雨があさあと降っていた。

「な、……んだこれ」

昨日は晴れだった。今日寝る前に見たテレビの天気予報のお姉さんも、「今週はずっと晴れの日が続くでしょう」と言っていた。いや、そんなことはどうでもいいんだ。たまたま天気予報が大外れて、まあ満月がこうこうと昇つて行くところを夕方この目ではつきり見たわけですが、それでも突然雨雲が押し寄せて大雨になる日だって、たまにはそんなこともあるだろう。

問題はそれ以前。

なんでおれは雨の中、夜にもかかわらず、外で一人突っ立つているんだ、ということ。

確かに昨夜、テレビを見た後一階の自分の部屋に行つて、明日友達に返す約束をしていたマンガをちゃんと机の脇に用意して、ベッドに入つて眠りについたはずなんだけど。

おれには夢遊病の気でもあつたのだろうか。ここが家の庭というならまだしも、見たことも聞いたこともないような場所で一人突つ立つているこの状況、自分を誤魔化すこともできない。そうだ、明日病院行こう。精神科。心療内科？ どっちだろう。

まあ、そう決意したとしても、ここがどこだか分らないのでは帰りようもないんだけど。

見知らぬ場所で、一人きりだ。しかも、夜。

自覚したとたん、体がズんと重くなつたような気がした。それは気のせいではなく、たぶん着ていたパジャマ代わりのスウェットが水を吸つて重くなつたせい。

いつそ夢なんじやないかとも思うが、濡れた布が肌に張り付く不快さも、むき出しの顔や首に落ちる雨粒の痛さも、裸足の足の裏と地面との間を通る水の冷たさも、全部がこれがリアルだと言つてい

るよつなものだ。

とりあえずは、雨宿りだ。このままでは風邪をひく。むづ遲いかもしれないけど。

そう思つて、ビニカ雨除けになるよつな場所はないかとぐるりとあたりを見回した。

そこは、閑静な住宅街に家があるおれでもちよつと戸惑つてしまふくらいに、静かだつた。雨の音しか聞こえない。天気が天気なせいか、歩いている人は一人もいなかつた。まさにこの場に一人きり。明かりも、街灯らしきものはどこにも見当たらず、少し離れた場所にある家々から洩れる頼りない明かりが唯一の光源だ。

そんな不確かな光しかないわりに、視界は妙にクリアだつた。薄暗くはあるが、結構遠くまで見渡せる。ぐるりと首を巡らせて見るに、どうやらここは広場のよう開けた場所らしい。

背中の後ろで、雨が水に降り注ぐよつな音がして、振り返つてみればなんとそこには噴水があつた。今は水が出ていないその噴水は、まさに広場の中央に設置されたものなのだろう。

なんでこんな場所にいるんだ、なんてことは、今はなるべく考えないよつにする。

足元は石畳になつているようだつた。一歩踏み出したおれの足の裏には、固いがまるやかな石の感触が伝わつてくる。
ぴちゃぴちゃと水音を立てながら、おれはとりあえず、広場を囲むようにして立つてゐる家々を目指した。

なんだか外国の家のよつな、ちよつとカントリー調の、同じタイプの家ばかりが規則正しく建つてゐる。きっとそういうコンセプトの一コータウンかなんかなんぞ。

三段くらいの小さな階段の先に玄関ドア。どの家もドアを広場の方に向けてゐる。みんな同じ色形をした家だつたが、ドアの色だけは様々だつた。縁に青に、黄色に赤。どれもちよつとくすんだ色をしていて、結構日や雨にさらされて使い込まれてゐるんだなあと思う。夜なのにそんなどこまでわかっちゃうおれつてすゞくない?

ちなみに視力は両目とも2・0。

さて、選り取りみどりなこの状況だが、そのどれかを選んで中に入れてもらうのは、ちょっと気が引けた。夜更けにびしょびしょの小僧が訪ねてこられても、きっとみんな困るだろう……というのは実は建前で、おれは人見知りなんだ。ただでさえ知らない人と話すのは苦手だつていうのに、こんな状況はなおさら気まずい。

幸い春先にしては温かい今夜の気温のおかげで、一晩外で過ごしても死ぬなんてことはない、はず。風邪くらいはひくかもしぬけれど、それくらいなんとなかなる。

そう判断して、おれは家と家の間の細い路地のようになつている場所で、夜が明けるのを、または雨がやむのを、待つことにした。究極の選択で間違つた方を選んでいる気がするけれど、チキンと呼びたければ呼べ。

と、今宵の宿を星空　じやなかつた、雨雲の下と決めたはいいものの、やっぱり雨に降られた格好のままで肌寒い。スウェットの中までびしょ濡れだから、一枚脱いだくらいではどうしようもない。

仕方なしに、服の端からだんだんに絞つてゆくことにある。幸い化学纖維のおかげで水はけはいい感じだ。

ぎゅっと絞つて、次。ぎゅっと絞つて、また次。

ぴちょん、ぴちょんと水が地面に落ちる音がやけに耳についた。きっとそれだけ静かだつていうことなんだろう。なにせ、ここは車が通る音ひとつしない。現代日本って案外静かだったんだなあ。あらかた絞り終えた後は、冷たく濡れた地面に座り込むのもいやで、壁に立て掛けあつた板の切れ端をちょっと拝借して地面に敷き、その上に座ることにした。それにしてもダンボールの一つくらい置いてありそうな場所に、なぜ板が。しかもベニヤじゃなくて一本の木をスライスしたような木目の板。捨てるんだつたらちょっと欲しいかもしない。

小・中と慣れ親しんだ体育座りで、おれはひたすら雨音を聞いていた。眠気は訪れなかつた。このまま寝たらひょっとして死にはしないけどね、うん、しないだらうけど、雪山の例（「寝るな！寝たら死ぬぞ！」）とこいつあれ）もあることだし、逆に眼が冴えてしょうがない。

ちよん、ぴちよん、ちよん。規則正しい音の合間に、異物が紛れ込んだのに気がついたのは、どれくらい時間が経つた頃だろ？
こつ、こつ、こつ、と、それは雨音同様規則正しかつたが、明らかにそれとは違い、何か固いもの同士がぶつかる音だつた。つまりは、靴が石畳を踏む音。

残業帰りのお父さんどううか。それとも飲み会の後の女子大生？どちらにしろ、こんな場所でうづくまつているおれは不審者に違いない。見つからないようにと願いを込めながら、体を小さくする。いや、までよ。もしかして、不審者どううがなんだろうが見つかつてしまつて、警察に連れて行つてもらえれば家に帰れるのでは？そのことに思つて至つたのと、不意に足音がとまつたのは、ほとんど同時だった。

傘が雨をはじく音が、すぐ近くでした。

路地に入りこんだおれには光など届くはずもなく、真っ暗なはずの場所で、でも確かにおれはそのひとの顔を見上げていた。
やたらと美貌な、金髪の男の顔を。

1・ねこ、拾われる（2）

暗闇の中で、確かにあれとそのひとは互いに互いの顔を見つめあつていた……んだと思う。いや、向こうはこっちの顔なんて見えていなかつたのかもしれない。眼鏡を忘れた近眼の人気が遠くの黒板の文字を必死に読み取つていてるみたいな顔をしていた。美形でもそういう表情をするらしい。

おれは気配を消そと極限まで体を縮めたコンパクト体育座りで、暫くぴくりとも動けなかつた。体は動かなかつたが、反対に脳みそはフル回転だ。

染めたり脱色したりではない、天然モノの金髪を短めに刈り込んだ、若い男。そのときのおれには、彼の瞳がびーだまみみたいに透明なグリーンをしていることまでなぜだかはつきり見て取ることができた。でも、そこで引っ掛けかかる場合ではない。

なんだこれ、なにこのひと、なんでこのひと。

ガイジン？

古式ゆかしいタイプの電子レンジが鳴る音が、頭の中で響いた気がした。ちなみに、木魚とお鈴の音でも代替可能。ぼく、ぼく、ぼく、ぼく、ちーん。

と同時に状況を理解したおれは、脇目も振らず一田散にそのひどいない方、つまり路地の奥に向かつて転げるように駆けだしていた。

（ガイジン？ 英語むり！ ていうかガイジン！）

そりやあおれだつて、中学3年間プラス高校入学から丸1年、真面目に英語教育を受けてきたわけですけれども！ ただでさえ人見知りなんだ、いきなり外国人と実践マンツーマン英会話をするには、少しばかり心の準備期間が足りない！

「おい！」

雨音とおれ自身の足音にまぎれて、後ろで慌てたよつな声が聞こえた気がした。だけど構つている暇はない。床に敷いていた板きれが逃げるとき足に引っ掛けたてバンッ、と大きな音を立てた。自分で立てるその音にビビリながら、おれは無我夢中で路地の奥を目指す。

せつかく絞った服が元のとおりびしゃびしゃだ。

止む気配のない雨の中を、おれは一人歩いていた。

(どこだよ……ここ)

あの噴水広場から、あの細い路地から、いったいどれだけ離れたんだろう。でも、それがわかつたとしても実は何の解決にもならない。

むしろあの噴水広場がいつたいどこだったのかが知りたい。悪いけど近場であんな二コータウン、聞いたことないぞ。あんな、外国映画のセットかテーマパークみたいな……つてもしかしてもしかするところは夢と魔法の国か？ いやいやいや、家から徒歩で行ける距離じゃないから。まさか夢遊病で電車やらバスやらに乗るなんて高度なことをおれはしてのけてしまったのか！？

ずいぶん歩いた気がするが、行けども行けども街灯はなく、地面は依然石畳。道の両側に建ち並ぶ家々はやっぱリカントリー風のレンガ造り。人の気配もナッシング。いやまあ、夜だから仕方ないか。来た道を振り返るが、もうどこをどう歩いたかすら記憶にない。よしんば道を覚えていたとしても、あそこに戻る気もないけど。

「なんかもう……疲れた」

あの場所から逃げるときに板に引っ掛けたせいで、右足の甲の皮膚が破れたみたいにひりひりしきりする。歩くたびに傷がひきつれて、ほとんど片足をひきずっている状態だ。傷がどの程度のものかは、あんまり見たくない……見てもどうしようもないし。

その傷のせいもあって歩くのに嫌気がさしてきたせいいか、体が急に思い出したみたいに眠気がやってくる。首を振つて睡魔から逃れ

ようとするけど、だめだ、眠い。雨が降つていなければそのまま場所なんて気にせず眠つてしまいそうだ。

そんなとき、丁度田についたのが歩道と車道を分けるかのように作られている生垣だった。大きな木が生えていて、雨をしのぐにはちょうど良さそうだし、生垣自体も枝葉がまばらなせいで容易に下に潜り込めるだろう。お逃げ向けて、地面はむき出しの土ではなく芝生だった。

もうここでいいや。

四つん這いになつてもそもそも生垣の下に潜る。やつぱり、予想した通りに雨から逃れられた。芝生は濡れているけど、石畳より冷たくない。

(服、濡れたままだけど……)

眠い、寝る。

自分の体温をかきあつめるように、おれは体を丸くしてすとんと眠りに落ちた。

光が瞼の裏に射した気がして、自然と目が覚めた。

一瞬状況が分からなかつた。なんで土の匂いのする場所で寝てるのかとか、体を動かすたびにちくちく当たるのはなんだろうとか、なんで服が湿つてるとか。

目だけ開けて微動だにせず記憶を掘り出すと、だんだん頭が機能してきた。そうだ、昨日は。

生垣の下から這い出でみると、雨は上がつていた。

泥のようになっていたと思つ。それこそ休みの日に一田中寝ていた時みたいに頭が重い。だけど実際はそんなでもなかつたのか、朝日は今まさに地平線から顔を出したところのようだ。洗いたての空気が朝日の下できらきらと光つている。早朝すぎるせいなのか、通りにはおれ以外人影はなかつた。

体が錆びついたブリキのおもちゃのよつこみしみしげつていて、きっと変な体勢で寝たからに違ひない。

起き上がる前に四つん這いのまま、ぐりぐりとストレッチする。あ、今背骨が鳴った。

背を伸ばしていると、ちょうどおれが寝ていた生垣の向こうから歩いてきていた野良猫が、おれを見てちょっとびっくりしたみたいに立ち止まってから、そそくさと歩き去っていった。

おお、第一村民発見。あ、いや、第一村民は昨日のあの男か……。人間より猫の方が話しやすいのに、なんて考えているおれは人間失格か？

「イテ」

ずきんと足が痛んで、ストレッチをやめ胡坐をかけて、右足を引き寄せた。

「うわあ、きもい」

足の甲に、真一文字に引つ搔き傷、その周辺には板にぶち当てた衝撃で内出血したのか、青痣ができている。血はもう止まっているが、ここへくん結構血管があるから、流血沙汰だつたんだろうな。やっぱり昨日は見ないでおいてよかつた。

その時、ぴちょんと頭の上に水滴が落ちた。

「ひゃっ」

なんだよ、と上を見上げると、張りだした木の枝の先の葉から昨日の雨の名残が落ちたらしく。そういういる間にもう一滴、ぴちょん、と

「わ……えっ？」

頭の上に落ちたと思ったのに、濡れた雨粒の感触は耳に届いた。瞬間にびるっと耳を動かして水を払う。……ってあの、動かすつて、おれ耳動かせない人なんですけど！ 両手を顔のサイドにもつていく。

あれつ。耳つてここにじやなかつたつけ？ なんか、手になんにも触れないんですけど……。

さわさわと自分の髪の毛をかき分けて、あるべきものを探す。ない。

ぴちょん。
ぴるひ。

おれは恐る恐る、今まで水滴の感覚のあつた場所 頭の上に手を持つていく。

もふり、と、触ったことのない感触がした。いや、実は触ったことがある。結構触ったことがある……ただしそれはおれのじゃない。少し離れた場所に、朝日を弾いて鏡のようにきらりと光っている水たまりを見つけて、おれは変な風に跳ねる心臓を宥めながらそこへ歩いた。

そつと覗きこむ。

あ、頭の上に葉っぱが じゃなくて。

おれの視線に反応するようこ、そいつはぴょこっと動いてみせた。

「な、な、な」

どこからどいつも、それはいわゆる、猫耳つてやつだ。

「こちにーつー?」

1・ねこ、拾われる（3）

驚きすぎて、うつかり猫っぽい喋り方しちゃったじゃないか！
猫っぽいって、そもそも猫は喋つたりしないわけなんだけれども。
いやいや、そんなことより。

いつから？ どうして？ つていうか、どうやって？

現代科学で解明可能な現象なのかこれ！

おれは水たまりに自分を映しながら呆然自失のまま、ひたすらも
ふもふとそいつを触つていた。気持ちいい。じゃなくて。

一見髪とまぎれてしまうような、真っ黒い色の毛並み。ちなみに
短毛種。どうでもいいか。

触り心地は実際、家の猫より気持ちよかつた。最高級のファーミ
たいな滑らかさだ。

「……夢か？」

あんな特殊な状況に突然放り出された昨夜ですらやらなかつたこ
とを今さらやつてみる。つまり、ほっぺをむにつとやる、定番のあ
れだ。うん、痛い。それ以前に未だ足がずきずきと痛いことに気が
付こう、おれ。

昨日の夜は、おれは多分、まだ信じていなかつたんだ。

夜闇というベールがめくらましになつて、どこかでこれは現実で
はない気がしていた。お化け屋敷に入つている時みたいに、こんな
現実離れした非日常は、きっと限定的なものなんだと思い込んでい
た。

だけど、ベールは払われた。

鳥が空を飛んでいる。電線も、電柱も、鉄塔もない広い空を。

昨日は見えなかつたものが、今のおれには見える。

おとぎ話みたいな街のむこうにそびえるのは、高層ビルでも東京

タワーでもなくて、まるで中世ヨーロッパみたいなお城だった。

*

おれは右足を引きずりながら、またもや歩いていた。

現代日本の男子高校生の運動量を舐めるなよ。ハツキリ言って既に足が棒のようだ。ちなみにおれ、中高と帰宅部でした。

なんだかなー、思いだしてみるとおれは昨日から歩いてばかりいる気がする。

突然だけど、たとえば旅行なんかで訪れた見知らぬ街で道に迷った時。バス停があるはずなんだけど行けども行けども見当たらない、なんて時。そんなとき、おれはなかなか立ち止まれないタイプだ。人見知りのおれじや通行人に道を聞くのも一苦労だし、地図引っ張り出すなんてもつてのほか。かといって立ち止まつたり突然引き返したり、そういうのもなんだか不審者っぽくて、ためらってしまう。自覚はなかつたんだけど、たぶんおれは人一倍見栄張りなんだ。引き返すにしても、わざわざ無意味に道を渡つたり、適当な小道で右折を三回繰り返したりして直進のまま引き返す。それなんていう一方通行？

「おい！ 危ないだろー！ ちゃんと前見て歩けチビ！」

「すみません……」

ずっと下ばかり見て歩いていたせいで、だれかとぶつかってしまったようだ。よろけた体が地面に倒れそうになるのをかろうじてとどめ、ぼそぼそと謝っているうちに、そいつはさつさと行つてしまつた。

……チビって言われた。身長170cm弱のおれをよくも な
んてね。ごめん嘘つきました、小数点以下四捨五入で164cmで
す。最近の発育のよろしいクラスの女子たちにすら抜かされて、男
女混合の背の順でも前から数えたほうが断然早いです。

だからといって、自分自身の力ではどうにもならない身体的特徴

を指摘するのはどうかと思うよ！ と、普段のおれなら言つ。でも今回だけは言い返せない。おれが人見知り体质だからとか、そういうんじゃないんだ。それもあるけど。

俺の脇を、小学生くらいのガキが追いかけっこをしながら走り抜けてゆく。お前ら学校はどうした、学校は。ぎやあぎやあと騒がしいそいつらの身長は、どう低めに見積もつても俺と同じかそれより上。

通りを歩く美人のお姉さん、180cm。立ち話の奥さん、180cm。新聞屋のおじちゃん、190cm。大工のお兄ちゃん、200cm。

みんな背、高くな？

*

水たまりの前で、モン・サン＝ミシユルかサグラダ・ファミリアみたいなつてどっちも城じやなくて大聖堂だつたつけ。まあいや。とにかく、巨大な城（仮）を見上げてぼつと突つ立つていたおれは、通りの反対でした「ガタン」という音で意識を取り戻した。ドアが開く音だ。街の住人が起き出したんだ！

おれは咄嗟に上に着ていたトレーナーのフードを田深にかぶつた。こうすればこの人知を超えた耳は見つからない。

それから、なるべく不自然でないように、さもこの街の人です、早朝散歩が日課なんですよ、という感じを心がけて道を歩き出した。どこに向かってるのかなんて、そんなのおれが知るわけないだろ。

歩き出す間際、ドアから出てきた人影のほうを横目でうかがう。目の端に捉えた姿形に、おれはこっそり失望してすぐに視線を戻した。

家から出でたのは、足首まで隠れるような長さのスカートをはいた女性だった。使いこまれたエプロンをつけていて、結上げた髪は金髪、手には箒をもっている。

いやいや、まだ一人目だから。おれは気を取り出して歩き出した。街は本格的に目を覚まし始めたらしい。歩いていると両脇の家々のドアが次々と開く。その度にびくっと肩が跳ねるのはしょうがない。いつどういう理由で呼び止められるか分からぬのだから。ドアから出でるのは、男性、女性、老人から子供まで、様々だつたが、みな一様に同じことが言えた。

金髪、茶髪、赤毛、白髪、アッシュ、プラチナブロンド……。みんな派手な色の髪に、堀の深い顔立ち。

「おはようジユディーさん、昨日はすじい雨だったねえ」

「おはようございます、リングーの奥さん。でもおかげで今朝は空気が清々しいわ」

「どことなくアメリカンな名前。でもしゃべっているのは日本語。

「おつと、今朝はリナが取りに来たのかい？　おうちのお手伝いして、いい子だな！」

「ふふ、ありがとボルノ兄ちゃん。牛乳一本くださいな」牛乳や新聞の配達はバイクでも自転車でもなく、みな徒歩。

「おーい、こいつは王城までいくかね

「なに言つてんだ爺さん。これは南の陶器街行きだよ。王城行きは反対だ」

ガラガラと音を立てて走るのは、一頭立ての乗合馬車。

それに付け加えて、みんなこの背丈。いくらおれが164cmだからって、そんな奇異の目で見られるほどの中身長じゃないだろ！？　うん、この格好を指して不審だと思つてるならそれは弁解できないけれども。

とうとうおれは認めたことにした。

「いやあどうも、俺の知つてる世界じゃなさそうだ。何の因果か、おれは巨人の街（外国仕様）にいるらしい。

これなら猫耳の一匹一匹いてもおかしくないだろ？　と種々の理解困難なもろもろをさておいて、そんなことも思うのだが、残念な

ことに見当たらぬんだ、これが。

いい加減足も限界だ。右足の感覚がなくなつてきている。ていうかおれ、裸足なんだよね。いくら整備の行き届いた石畳とはいえ、細かな砂利や小石が足の裏に当たつて、無事な左足も痛い。

さつきから寒気がしてしうがない。一晩外で濡れた服を着て寝た代償だろう、馬鹿はひかないというあれだ。わーい、おれ、馬鹿じやなかつた。無理やりにでもテンション上げてかなうとうつかり倒れてしまいそうだ。

傍目におれはどう見えてるんだろうな。顔を隠して下を向いて、びしょ濡れの服を着て、足を引きずりながら歩いてくるチビ。

うわあ。想像してその不審者具合に泣きたくなつた。テンションだだ下がり。

「止まれ」

まさにおれと同じ感想を抱いた人がいたんだろうか。おれはこれ以上ないといふほどにビクッと肩を尖らせて、フードの下からあたりを窺つた。

田の前に誰かの足が見える。このままいけばぶつかるとこだつた。どうやらその人がおれに声をかけたらしい。

「じめんなさい」

さつきと同じで、小声で謝つてその横を通り過ぎようとする。「止まれと言つているだろー！」

「ひツ」

なのに再び呼び止められて、しかも道をふざぐように回つ込まれた。

おれは恐る恐る、もう少しだけ頭をあげる。

遠巻きにみんながおれのことを見ている。こんなに注目されたのは幼稚園のおゆうぎ発表会以来に違いない。

おれの前に立つ人の両脇には、レンガでできた頑丈そうな壁があつて 壁？

思いきつて、ずっと視線を上に移動させる。

茶色の壁は両側のずっと奥までつながっていた。おれの前だけ壁がない。というより、これは門か？

「王城に何用だ、子供」

「王城？ 王城つてつまり…… 城？」

無心で歩いていたのに、おれはひつやら遠目に見えたあのお城まで歩いてしまったらしい。

どうやってこの状況を切り抜けようと視線をまた下に戻す途中、おれを問い合わせる男の顔が目に入つた。おれはそいつを目にしたとたん、「それ」から視線を動かせなくなつた。

清潔そうな茶色の髪の合間に、見えたのだ。

「犬耳だ！」

1・ねこ、拾われる（4）

彼の髪よりちょっと薄目の、金茶色をしたそれは、確かに耳だつた。へなつと垂れた、「ゴールデン・レトリー・バー」の耳に似ている。彼は木の実みたいな色と形をした耳を真ん丸に開いて、おれを見下ろしていた。手には槍らしき武具をもつていてちょっと怖そなんだが、その子供みたいな目と「冗談みたいな犬耳が雰囲気を和らげていた。

ちなみに彼も例にもれず、身長190cmオーバーだ。下手すりや2メートル越えもあるかもしれない。

身長という壁を乗り越えて、だがしかし、おれとお前は固い絆で結ばれている！ 猫耳犬耳という身体的特徴で！ そのときのおれはそう信じて疑わなかつた。

「あの！」

彼が何か言いたそうに口を開きかけたそれより先に、おれは声をかけた。

同時に、ぱさっと濡つたフードを頭から外す。ぴこりと顔を出す、おれの猫耳。

彼の目がさらさまん丸くなつた。

「あの、おれ」

何て言おう。道に迷いました？ 突然耳が生えてきたんです？ どうやつたらそんなに大きくなれるんですか？

「言つべきことはたくさんあつたが、何を言つていいのかわからなかつた。どれを言つたとしても、頭を疑われるんじゃないかと思つて。

あうあうと口を動かしてこるつちこ、犬耳な彼は我を取り戻したみたいだ。

そして、何を言つでもなく、迅速な動作で懐から何かを取り出し、
口にくわえ、

ピィィィイー！

そこから、脳天をつぶやくような音が発せられた。あれは笛だつたんだ。一拍遅れて気付く。

「君！」

槍を持つ手とは逆の手がおれの田の前に迫る。笛の音を聞きつけて、門の奥からたくさん足音がある。根拠なんかないけれど、いつこうときビリするかつて、きっと誰であつても大差ないと想つんだ！

おれは疲れた足も傷も、ふらつと体のことをじの時ばかりは忘れて、さつと身を翻した。
逃げろ……

*

白痴じゃないがおれは運動音痴だ。体育の成績は可もなく不可もなくの3、徒競走だってマラソンだって、いつもビリか最後の方。それなのにおれはうまく追手を振り切ったみたいだった。細い路地や草の茂った空き地を突っ切ったのが勝因だろう。おかげで手足に細かい切り傷や擦り傷ができるが、それもこの勝利の勲章つことにしておく。

おれは今、公園の池の周りにある生垣に身を潜めている。公園、だらう、たぶん……。池と芝生と木と小道がある。遊具はないし、住宅街にある公園みたいに狭いけど。

正直、どうして追われることになったのかさっぱり分からぬ。おれ、なにか悪いことしたつけ。それとも、犬耳は許されても猫耳は許されないのか？

長い追いかけっこの中で、日はいつの間にか南中に達していた。
あぐらをかくとお腹が鳴る。腹減った。

こつまでこんな場所に隠れていなきやいけないんだらう。できればどこかでごはん食べたい。……お金ないけど。誰か惠んでくれないかな。

いすれにせよ、ここにいても食べ物が落ちてくることはない。ちよつと場所を移動しようと顔を生垣から覗かせたちょうどその時、

「いたか！」

「いや、見つからない」

「くそ……北地区の連中にも知らせろ、もうこの辺りにはいないのかもしれない」

「ネコだけあつて逃げ足が速いからな……」

姿形は見えないけれど、声はそれほど遠くない場所で聞こえた。危ない危ない。すぐに頭をひつこめたから幸いおれは気づかれなかつたようで、兵隊さんたちの状況報告だけが耳に届く。

猫だけあつて、つてねえ。おれは人間だつづーの。なんかへんてこな耳は生えてきましたけれども、これでも16年と3ヶ月、人間として精一杯生きてきたんだい。

しかし、彼らがまだまだおれを探すのを諦めていないことは明らかになつた。どうする、危険を顧みず場所を移すか？　まだここにとどまるか。

逡巡していると、目の前の風景がくらりとぶれた。

ああ、もう限界だ、田が回る。腹が空いて……じゃない、頭が痛い。

このまま見つからないのと、見つかって温かい食べ物を恵んでもらうのと、どっちがいいのかちょっと考えた。　それは最後の手段だ。もうちょっとがんばる。

……がんばつても誰も助けてくれないのに？

ここにおれを知っているやつなんていないぞ。

猫耳なんてへんなもんが生えちまつたお前を、誰が助けてくれるんだ？

弱気な考えが脳裏をかすめる。だめだ、だめだ。腹が減つて、体

調は最悪で、体中傷だらけで。なにもかもがネガティブな方向へ向かう。

そんな時だつた。

耳元で、再び音がした。

ガサリ。

おれは反射的に半身を起して、耳をそばだてる。そうしている間にも、ガサガサという音とハツハツハツ、という細かい呼吸音が近づいてきて

「わん！」

「わああああああああ！？」

ズボツ、と生垣に突然頭を突っ込んできたそいつは、おれの顔を見てうれしそうに一声吠えた。

犬耳！ ジゃない、犬！！

見つかった！ つーかでかい！ おれの頭をぱくりと丸呑みできちゃいそうな顔面サイズ！ この国は人間だけじゃなくて犬もでかいのか！？ おまえ、おれ、食つもの、食われるものの関係じやないかこれ！

命の危険を感じたおれは、一目散にそこから飛び出した。

そのまま駆け出す予定だったおれの体は、横から伸びてきた手に脇の下を支えられ、いとも簡単にひょいと宙に浮く。

気持ちだけは100メートル走スタートしていたおれは、そのまじたばたと手足を動かすが、一步も前に進んでいないことに気がついてはたと立ち止まる。立ち止まるというか、動きを止めただけだけど。

「ようやく見つけた」

もういちいち体を硬直させるのも疲れたよ、パトラッショ。でもそうせずにいられないこの状況。おれを持ち上げた男もそれがわかつたのか、子供抱きに持ち替えてぽんぽんとおれの頭を撫でてくれる。いや、おれ、そこまで子供でもないんですけどね。

抱きかかえられることで接触した体の半分が、ぽつと温かくなる。

「よくもまあ近衛隊と警備隊の包囲網から抜け出せたもんだ。草薙を通つたら、あれがよかつたんだ。匂いが消えた。それに、雨あがりなのも味方についた。水の匂いは鼻を紛らわすから」

そう言つて頬笑んだそいつは、おれも見知った顔だつた。

「……なんで」

短い金色の髪。びーだまみみたいなグリーンアイ。ハリウッド映画にでも出てそうなとびっきりの美形。

「探したよ子猫ちゃん。急に逃げるし、血が点々と落ちてたし。まあそのおかげで見つけられたんだけど」

まるで同意するように足元で犬が鳴いた。改めてちゃんと見ると、名犬ラッキーみたいな、頭のよさそうな犬だ。

おれはくらくらする頭でわんこに手を伸ばそうとして、体勢を崩して抱え直される。

「大丈夫か」

最初から、日本語喋れるつてわかつてたらなあ。ここが巨大外人ばかりの街だつて、わかつてたら。

わかつてたら、おれはあの時、逃げなかつただろうか。

それを考えなかつたわけじゃない。歩いている間、実はちょっと後悔したりもした。

「なあ、お前」

緑の瞳があれを捕らえた。普段のおれなら委縮する要因にしかならないガイジンの瞳に、今のおれはなぜか安堵すら感じていた。

「うちの子になるか?」

ああ、あつたかい。おれは彼の言葉が俺に向けられた質問の形になつていて、ことに気がつかないで、温かい体温を求めるようにすり寄つた。

だつて、もう、いろいろ限界だ。

その仕草に男は笑つた。

ぽん、と再び頭を触られる。

「お前、名前は?」

「……鈴鹿倫^{すずかりん}」

「リン、いい名前だ」

それっきり、瞼はもつひとつやつても開けていられることができなくなつて。

ちゅ、と鼻の頭になにか湿つた暖かいものが触れた気がしたけれど、気のせいかもしない。

*

それからどうなつたかというと、三日三晩寝込んだおれは、結局そいつ エドの家に厄介になつてゐる。

目覚めた場所は彼の家。おれと彼が初めて会つたあの路地があいつの家の脇だつたのには驚かないけど、おれがナーナ（エドの飼つているあの「リー」の名前だ。ちなみにメス）に発見された、あの場所まであいつの庭だつたなんておまけ付きには驚いた。そういうえば板塀の下をぐぐつた氣もする。ちょうど子供が一人抜けられるくらいの穴が開いていて、おれが雨除け下敷きにしていた板はその修理用だつたとか。

そのことを指して、エドは「リンが俺の家に来るのは運命だつたんだよ」とかふざけたことを抜かすけど、そんなのはただの偶然かなにかだ。そうに違いない。

おれが寝込んでゐる間に、彼の家の扉には「猫飼つてます」のシール、通称「猫シール」が貼られた。いや、犬つて書いてあるシールは見たことあるけど、猫にもあんのかよ！

つていうかさ、そもそもおれ、猫じやないから！
おれ、人間だからな！？

2・ねこ、餌付けされる（一）

それはおれがまだ小学生の頃、雨も降りしきる6月のことだった。ご多分に漏れずその日も雨で、おれは傘に当たる雨粒の音をBG Mに足元の水たまりを避けながら一人で通学路を帰っていた。買つたばかりのオニコーの長靴をむざむざ汚すのは忍びなく、道路の凹凸を慎重に読み分けて歩かなければならぬ。

次の水たまり迂回ルートを決定して一步を進めようとして、おれはふと足を止めた。

ちゅうどゴミ捨て場の脇を通るところで、くるりと首を廻らしても視界に映つたのはルール違反のダンボール箱くらい、あとは特別妙なものはない。一体何が気にかかったのか、自分でもよくわからなかつた。

にしても、小学生ですら夕方にゴミ出ししちゃいけないことを、今日が資源ゴミの日でないことを理解しているというのだ。

「あと、ダンボール箱は置んで捨てなきやだめ」

だがおれがそれをする義理はない。気のせいだつたかと再び歩き出そうとした足が、再び止まる。

「こやーあ

ゴミだと思ったダンボール箱の中に、猫がいた。

びしょびしょに濡れた箱、敷かれた新聞紙、その真ん中で今にも消え入りそうな声で。

灰色に黒い虎模様の入った子猫は、濡れそぼつた毛がべつたりと張り付いたぶさくな顔で、おれを見上げて必死に鳴いていた。

その時幼いおれの心によぎつたものを、おれはもう覚えてはいな
い。

一体何を思つたんだろうな。雨の中こんな場所に生き物を捨てた人に対する怒り？ 簡単に命を捨てられることに対する呆れ？ そ

れとも、小さな子猫を憐れんだだらうか。

おれは段ボールの上に傘を差し出す。その分肩や背中が濡れたけど、気にならなかつた。

しゃがみ込むと、子猫は自分の状況が分かつてゐるのかいないのか、鳴くのをやめてくつくりとした目でおれを見つめる。どんなにかわいこぶつても、びしょ濡れだからやつぱりぶさいくだつた。

「おまえ、うちの子になるか？」

手を伸ばすと、やいつは濡れた鼻面を押し付けて、場違いも甚だしこじとこじりひりと喉を鳴らした。

「しようがないなあ」

おれは子猫をそつと胸に抱き上げた。

*

体がまるで水の中にいるように緩慢にしか動かなかつた。心なし
か視界もぼやけていい。

ああ、夢だ、と思つた。

知らないベッドに寝ていたおれはゆつくりと体を起こす。
すぐそこに窓があつて、そこには映つたものにおれは確信した。
(やつぱり夢だ)

健全な男子高校生の頭に、ひどく滑稽なものがくつついでいる。
もしかしてと腰に手を回すと、その下から黒い尻尾が現れた。
はて、おれには変身願望でもあつたんだろうか。ちょっと危ない
感じだ。秋葉原にはいつたことないし、テレビで流れるちょっとア
レな昨今の流行カフェに行きたいと思つたことなんて一度も……な
いとは言い切れない辺りが困る。
(別に困らないか、所詮は夢だし)

「リン」

いつの間にかベッドの脇にやたらと長身の男が立つていて、おれ
の名を呼ぶ。ひどく唐突な登場だが、これも夢だから、の一言で片

付いてしまつ。

父でもない、親戚の誰でも、学校の先生でもない。だれだらう、知らない男だ。

男は規格外にデカい身長をしていて、顔を見上げるのに首を傾けるのだけて一苦労だ。のたのたと顔を上げるおれをまるで阻むかのようなタイミングで、これも無闇に大きな手がすっと伸びてきて、おれの額から瞼までを覆つた。

「下がらないな」

柔らかい手ではなかつた。皮膚が硬化して戾らなくなつた、働く男の手だつた。

冷たい手がそのまま頬をなぞり、するりと首のあたりを行つたり来たりする。

なにをしているんだろうと疑問に思わなかつたわけじゃないが、ひんやりとした温度が気持よくて、おれは目を閉じられるがままにされていた。

ふと顎を持ち上げられ、撫でる手が止まつたことを不服に感じたおれは目を開けようとし、また視界を阻まれた。何が起きたのかよくわからなかつた。

口に何かを入れられる。舌で触ると痺れるような苦味が広がつた。続いて、黒い影が近づいてきて覆いかぶさつたかと思つと、唇をふさがれる。びっくりして固まつているうちに、今度は生温かい温度の水が口内に入り込んでくる。

視界いっぱいに広がつたそれが男の顔だと気がついたのは、影が離れてからだつた。

「まだ寝てなさい」

手が再び額から瞼を撫ぜ、肩に回り、優しく布団に倒される。導かれるままに、おれは深い眠りへと落ちてゆく。

次に目を覚ました時には、何もかもがクリアだつた。

目を開けてまず目に入ったのは見知らぬ天井。

ん？……見知らぬ？

がばつと体を起こす。

すぐ左手に窓があった。木枠の窓に、分厚いガラスが嵌っている。そこから見える景色よりもまず、そこに映る自分に目がいく。

デジヤヴ？ なんだかとってもよく似た状況を覚えている。

両手を頭の上へ。すべすべのベルベットのさわり心地がおれの指を待っていた。

「……ふつ」

思わず笑っちゃうね、この状況。鏡代わりの窓ガラスに、すぐ無理矢理感のある微妙な笑みを浮かべたおれが映っている。ぱたん、と何か軽いものがベッドを叩く音がしてそちらを見やると、案の定そこに見えるのは真っ黒い尻尾。

寝起きの常で回転数の遅かった脳が、急激に活動を始める。

がしつと驚掴みにしたそれは、おれの気なんて知らずにぴるぴるとん気に揺れていた。ああ、これがおれと全く関係ないものであつたら、そんな様も頬笑み一つで流せたのに。

だけど、掴まれた感覚は確かに自分に伝わっているわけで。

（夢だけど、夢じゃなかつた！ いや、夢じゃなつた！ 全部！）ぎゅうっと尻尾を掴む手に力が入る。尻の先 つてのもおかしな表現だけれど、そうとしか言いようがない から鈍い痛みが駆け上ってきて、慌てて手を離す。

おれはそつとベッドを下りた。

それほど柔らかくないベッドだつたが、高さだけはホテルのベッドよりもあって、つま先が辛うじて床に触れるくらいだつた。

足には真っ白い包帯が巻いてある。体重をかけると、僅かに足の裏が痛んだが歩けないほどではなかつた。

包帯もそつだが、この服。おれのスウェットはどうへ行つてしまつたんだろう。綿100%って感じの生成り色の上下は、おれには少し大きすぎる。嘘。とても大きい。

上に着ていいシャツは余裕で腿の下まであつたし、寝ていいときは関係なかつたが、立ち上がると今にもズボンが下がつてしまふ腰のあたりを手繰つて常に手に持つていなければいけない。

尻尾は邪魔だつたので、右足と一緒にズボンの中に入れた。十分ゆとりがあるので窮屈な感じはない。

冷たい木目の床をそろそろと歩いて部屋を出る。部屋を出るとすぐ目の前に階段があつて、一段がやたらと大きいせいで慎重に降りなければならなかつた。

階段を全部降りると、廊下にはいい匂いが漂つていた。

食べ物の匂いに、腹がきゅうつと鳴る。意のままにならない尻尾が、尻をぱたぱたと叩いた。

……お前らはもつと不安がれよな。どこだかもわからない場所に、今おれはいるんだから。

2・ねこ、餌付けされる（2）

廊下には扉が四つほど並んでいた。おれから見て一番奥にあるのは玄関扉だろう。形が他のとは違う。

そこを田指す、という選択肢もありっちゃありだったが、おれは腹と尻尾の要求を呑むことにした。匂いの元と思われる、一番近くの扉を開ける。

かなり気をつけたつもりだったが、きい、とか細い音がした。くそっ、蝶番め。

細く開けた扉から少しだけ顔を出して中を窺う。

キッキンと思しき場所で、こちらに背を向けて、男が鍋をかき回していた。そのせいか、おれにはまだ気が付いていないのかもしれない。

生成りの開襟シャツに、青いエプロンをしている。なんだか鼻歌まで聞こえてくる。聞いたことのないメロディだ。

彼が鍋とまな板の間を交互に立ちまわる度、横顔があらわになつた。

「……」

気がつかれていないので、おればじつくつと男を観察する。

いつも言つちやなんだが、エプロンが究極に似合つていない。キッチンなんていう場所も不似合いだ。

ハリウッド映画の主役として出てきそうなイケメンだった。ただし、恋愛ものじゃなくて戦闘メインのアクションもの。ガイジンの年齢つてよくわかんないけど、多分まだ若いはずだ。二十代前半くらいだろうか？ 仕事か恋かと聞かれて、迷わず仕事を取っちゃいそうな、ストイックな横顔。でもそういう主人公に限って、ミッシ

ヨンの途中に助けた女性と熱烈な恋に落ちたりするんだ。

それが、なにゆえ鼻歌を歌いながら料理なんて……

「起きたか」

おれは反射的に扉を閉めてしまった。

なんなんだ、ちゃんとこっちに気づいてたのか。

もう一度扉を開けると、彼はストイックなはずの顔をここにこなせておれを手招いている。

「腹減つたろう、飯にするから座つてなさい」

目でキッチンの奥を示す。正方形のダイニングテーブルがちゃんと置いてあつた。

早く料理に戻ればいいのに、彼はおれからなかなか田を離さない。縁の目が、あのビーダマの目が優しい色でおれを見つめている。信頼して、いいのか。

さあ、ついで。

……おれ的にはシリアスな場面だつたのにな。自問自答のはずの問いかけにおれの腹が大きな声で返事をした。曰く、「いいともー

！」ってね、お昼の番組じゃないんだから。

「もうできる」

男の声はいかにも「笑いたいのを必死でこらえています」といつた声だった。くそ、いまさら引くに引けない。

おれはなんとなく部屋の壁ぎりぎりを伝うように歩いてテーブルについた。テーブルの真ん中には堅そうなパンが盛られた籠と、塩コショウの瓶が置いてあつた。

男は相変わらず鼻歌を歌つていて。おんなじ歌を何度も繰り返すせいでのわかったことがある。あの人はちょっと音痴だ。おんなじはずのメロディが結構変わる。

「できたぞ」

二つの皿を持って男は向かいに座つた。小さじまつの一いつをおれの前に滑らせる。

真向かいにある端正な顔を見つめることは小心なおれにはひょっこり

とできなかつた。笑われて恥ずかしかつたせいもある。

自然、視線の行き場所は目の前の皿になつた。ほんのり色のついた透明なスープに、細かく切つた野菜と鶏肉が入つてゐる。表面に浮いた油が食欲を誘つた。

ちらりと上目で彼のほうを見る。彼は微笑んでいた。

「どうぞ、子ネコちゃん」

おれはスプーンを取ろうとしていた手をとめた。

そいつにとつては些細な冗談だつたかもしれない。でもおれにとつて、それはいま最も言つてはいけない言葉だ！

どうした、とこちらを窺う気配がする。おれはキッとそいつをねめつけた。

「おれは、猫、じゃない！」

今日初めて出した声は痰が絡んでとても聞けたものじゃなかつたが、男はちゃんと聞きとつたようだ。

「……ネコだらう、どう見ても」

「どう見ても人間だ！」

「リン」

なだめるように名前を呼ばれる。まるでおれが聞き分けのないことを言つてゐるみたいだ。

どうして？ おれは当然の主張をしてゐるまでだ。確かにへんてこな耳と尻尾が生えてきたものの、16年間人間として生きてきたんだ、勝手に四足歩行生物扱いされたまらない。

「わふっ」

第三の声が沈黙を破つた。

「ナーナ」

おれがちゃんと閉めなかつた扉を鼻で押して、コリー犬（ただし体格はふつつの1・5倍）が入つてくる。どうやらナーナといつ名前らしい。

「これは、犬だよな」

男が頷くのを確認して、おれはまくしたてる。

「そうだ、犬つていうのはこういうやつのことを言つんだ。頭に犬耳がついてるからつて、それは犬じゃ、ないだろ！？」

「頭に犬耳？ それは……イヌだろ？」

「はあっ！？ どつちも犬なのか！？」

「はあっ！？ どつちも犬なのか！？」

おれは逃走劇の引き金となつたあの犬耳青年のこと思い出しながら、わかりやすい例だと思つて話に出したのだが、あつさりと肯定されてしまう。

「犬、犬つて……違うだろ？ よ、彼とこの子は！」

「なんだか誤解があるみたいだ。リンの言う犬耳とは、イヌ族のこどもだろ？ ナーナはただの犬だから、同じではない」

「……イヌ族？」

「リンはネコ……ネコ族だろ？」

「……ネコ族？」

それは転勤族とか暴走族とかと似た何かですか。いや、転勤族と暴走族は似てないけど。

「なにそれ？」

「ネコ族は自分たちのことをそつは呼ばないのか？」

「そんなこと言われても。

「……おれはネコ族、とかいうのじゃない」

「じゃあ何なんだ？」

「人間だ」

「……」

結局堂々巡りだ。

どうやら犬とイヌ、猫とネコが別ものであることは分かつた。イヌ族やネコ族を「イヌ」「ネコ」と呼びならわすのはまあ、通称といふか……省略形なんだろう。わかりにくいつたらありやしない。本当はまだまだ聞きたい」と、聞かなければならないことがたくさんあった。

「ここはどこなんだ、なんていう国、日本とどれくらい離れてるの、

なんでみんな日本語しゃべつてんの、なんでみんな体が大きいの、
それでこの耳は、何。

けれど彼が「冷めるぞ」とスープを指して言つので、とつあえず
聞くのは一つつきりにしておいた。

「あ、ああ。そりいえばまだだつたな。エドガー＝エインズワース、
エドつて呼んでくれて構わないよ」

日本語しゃべつても名前は英語風なんだなあ、とそんなことを考
えながらおれは何の気なしにスプーンを口に運んで、一口皿をすす
つた。

「……」

吐き出せなかつたおれを、誰か褒めてくれ！

2・ねこ、餌付けられる（۲）

まずいわけじゃない。しっかりと鶏の風味がきいていて、野菜も程よく煮込んである。悪くない味だ。むしろおいしい部類。これが、もつと薄味ならば。

濃い。猛烈に濃い。ショッパイ。塩辛い。海の水ようさらじに辛い。おれは一口でジワリと涙が浮いてくるくらいこの中に、エドときたら、

「ん、塩が足りなかつたか？」

とかふざけたことをぬかして、食卓塩に手を伸ばしてさわぐ。好みの問題とかいう話では到底片付けられないだろう、これ。健康に害が出ておかしくないレベルだ。高血圧？ 脳卒中？ そんな感じの病気につかりそう。

エドは一振り塩を足したスープをスプーンでぐるぐると回して、もう一度口に運び、満足そうにしている。いまさら塩一振りで味が変わるものがない気がするが、もしかしたら何かおれの勘違いだったか？ 起きたばかりで味覚がマヒしてるとか？ そんな話を聞いたことがないけど。

試しにもう一口だけスープを飲んでみることにする。

「……うう

やつぱり常識を超えたショッパイだった。

何も言わずスプーンを置いたおれを、パンをつぎつてスープに浸していたエドが見とがめた。

「もう食べないのか？」

「……うん」

おこしそうに食べているエドをみると、おれのまづがおかしい気がして、なにも言いだせない。

「三日も寝込んだんだから、急には食べられないかもな」

「三日！？」

「そうか、そんなに。それならちょっと味覚がおかしくなつてもしようがないかもしね。きっと今日の晩には直つてゐるに違ひない。氣を取り直したおれは、黙つてエドの顔を見ているわけにもいかず、視線を脇に逸らした。足元でナーナが、餌皿からご飯をもらつていた。おれの視線に気がついたのか、理知的な黒い瞳が見上げてくる。なりはやたら『テカくて威圧的だけど、こいつに敵意はないんだろう。尻尾がふりふりと揺れていた。カワイイ。……にしても、あの餌もしょっぱいのかな。

下を見たついでに、自分の足も目に入つてくる。椅子が高いせいでもちゃんと床についていない足に巻かれている、白い包帯。

「これ、あんたがやつてくれた、の」

今さら人見知りがぶり返した。明らかにおれより年上の男に対して、ため口をきくのすら躊躇するような性格なんだ、普段のおれは。さつきはちょっと、気が高ぶつていただけで。

「もう痛くないか？」

首肯すると、よかつた、と微笑まれた。

「……ありがとう」

「どういたしまして」

彼の言動は、なにかいちいち、子供を相手にしてゐるみたいだ。

遅い昼食 三日寝込んだ上に、もう今日は半分過ぎていたわけ

だ を終えたのとちょうどのタイミングで、カンカンカンと三回、金属同士を打ち付けるような音がした。部屋の外からだ。

「おーいエドお。エドガー、いるかあ」

その声に一番初めに反応したのはナーナで、餌を食べ終わつてからずつと行儀よくエドの足元にお座りしていたのが、ぱつと部屋の外へ走り出す。

エドは大きくため息をついて立ち上がった。一人取り残されるの

もあれなので、おれも彼らに続く。

キッチン兼ダイニングを出ると、おれがさつき玄関だらうと田を付けた扉が外側に開いていた。逆光で目が慣れず、影しか見えない。

「なんだ、こんな時間に。仕事はもうあがりか?」

おれに対していた時とは全然違う、エドの呆れた声がする。それは同時に親しいものへの友好がみてとれた。

「お前が昨日登城したつて話を聞いてさ、居ても立つてもいられず別に登城したわけじゃない、城内の役場に用があつただけだ」

「そう、それ。聞けばお前」

そこで、影の片方が体を傾げた。家の奥を覗き込むよう。

影はずんずんと廊下をこちらに歩いてくる。たほど長い廊下ではないから、おれのいるところまで五歩で、そいつはやつてきた。

キッチンの奥に隠れようとしたところを、ひょいと持ち上げられる。またか。おれ、簡単に持ち上げられすぎだな。

「はなせつ」

高い高いの要領で、おれは男の顔と同じ高さまで引き上げられた。知らない顔だ。エドよりも暗い枯れ草色の金髪と、深い青色の目。美形だが、甘つたるい顔をしている。エドをアクション映画の主人公にしたら、こいつは恋愛もの。しかも、コメディ路線の主人公に違いない。一枚目でタラシだが、お軽いせいで数多の女に振られる役どころ。

まあ、おれ目線でぱつと見そつ見えるつてだけで、実際は硬派なやつなのかもしれないよな。引き結ばれた口元と真剣なまなざしはとても軟派には見えない……と思つたのは一瞬。

次の瞬間にはどちらもだらしなく歪んだ。黙つていれば美形つてこういうやつのことをいつのか。

「かーわーいーいーつ！」

はつ？ カわいい？ おれが？ そんなこと言われたの、小学校の低学年、親戚のおじさんおばさん以来だ。

「これ、これが！？ おまえが飼い始めたネコつーのはー！」

ぐりぐりと頬ぞりされて、いくら美形でも男にそんなことされてもうれしくない！逃げようともがくのが精一杯で、そいつがなんか言つてるんだけど、とても耳に入らなかつた。

「ちつちえー！かわいー！黒ネコだ！目も真つ黒なんだな、珍しー！」

ちょ、テン・ショーン、高いし、ずりすり、するの、やめてー！手を突つ張つても頬ぞりから解放されず、ちょっと涙目になつているところをズボッと後ろから引つこ抜かれる。

「嫌がつてるだろう」

エドはすぐにおれを床に降ろしてくれた。ほつと一息。やうやつて油断したのが悪かつた。

「ねえねえ、尻尾も黒いのか？どこ尻尾」

ナンパ男は、あろうことかおれのズボンにズボッと手を入れて！おれの尻尾を鷲掴みに！

「ひゃあっ」

他人の手に尻尾を触られたせいで変な声が出た。わき腹を撫でられる、もしくは膝小僧を手でぞわつとやられた時みたいな。

「わー真つ黒ー」

ズボンが落ちないよつに手でたぐり寄せるので精いっぱいなおれは、のん気な感想を漏らしているそいつの足を思いつきり踏んづけるくらいしか抵抗ができない。

「いたいよネコちゃん」

しかもあんまり効いてない。

「いいかげんにしろ」

「あいてツ」

エドがナンパ男にげんこつを喰らわせたらしい。そのおかげでそいつはおれの尻尾を離し、手を頭にやつた。……こいつも見上げるほど背が高い。いちいち首の疲れる連中だ。

「何しに来た、アスター」

「だから、お前のかわいい子ネコちゃんを見にだよー」

アスターと呼ばれた男は頭を擦りながらへらへらと笑った。なんとなくこいつの性格がわかつってきたぞ。おれのファーストインプレッションのそのままだ。

エドは再びため息をつき、おれに向き直った。

「……はあ。リン。こいつはローレンス＝アスター。よろしくしないでいいからな。覚えなくてもいい」

「おい、そんなこと言わなくともいいじゃないか。……リンちゃんつてゆーの？ カわいいでちゅねー、いくつ？」

……なあエド。本当に猫とネコ族は別物なんだよな？ なんかこの軟派男の感じ見ると、おれ、すげく猫扱いされてる気がする。

猫つつーか、赤ん坊？

「十六」

「えつ」

「十六！」

そこでエドまで驚くのが非常に気に食わない！ ここがおれのこと何歳だと思ってたわけ！？

「……エドお前、何歳だっけ」

「先月十九になつた」

「えつ」

次はおれが驚く番だった。三つしか違わないのかよー もつと、五つ六つは年上なんだと思っていた。

2・ねこ、餌付けされる（4）

女三人集まるとなにかとは言つけれど、男三人でも十分姦しくなる。いや、圧倒的にこの軟派男 アスターのせいな気はするけど。一度は離れたアスターの手はいつの間にやらおれの髪やら耳やらをいじくついて、エドが魔の手から取り返してくれようとはするものの、取り返し取り返され、取り返されたら取り返し、いいかげん大岡裁き待ち状態。越前守役は誰だ。ナーナ、お前でもいいから助けてくれ！

そのナーナはといえば、エドの足元で行儀よくお座りをしているけれど、おれたちが遊んでいるとしても思つてるとか尻尾をせわしなく振つて羨ましそうにしている。助けは望めなさそうだ。

だから、開けっぱなしの玄関からまた違う声がしても、おれはもうどうにでもなれといった雰囲気だった。

「「ご主人様！」

ご主人様、つてそれこそそういうカフュにでも行かないと現代日本ではついぞ聞くことのできない呼称だ。一度は呼ばれたいぞ、ご主人様つて。いや、この場合は別に羨ましくない。これがかわいい女の子の声だつたら是非にお願いしたいが、聞き覚えのない男の声じやあ……ん？ 聞き覚え、ないか？

「「ご主人様、探しましたよ、急に仕事場から居なくなられたらしいじゃないですか……あ」

「あ」

一度見たら忘れられない、ゴールデン・レトリー・バー風の茶金の耳。ふあさりと搖れたふかふかの尻尾。こいつはあの時の

「犬耳！」

「あ、ああ、あの時の……！」

「何だフレド、お前リンちゃんを知り合ったの？」

アスターが首を傾げる。

知り合いつていうか、そう、忘れちゃいけないのは彼の外見じゃなくて、おれが街中追い回される原因になつたってほうだった！

おれは慌てて、隠れる場所を探す。隠れる場所、隠れる場所……ああ、もうエドの後ろでいいや。

「どうした？」

エドが不思議そうに聞いてくるが、うまく説明することができず、ただ首を振ることにする。

「リンちゃん、耳が寝てるー。かわいー。どうせならエドじゃなくて俺の後ろに隠れてくれればよかつたのにー」

おれとエドはほとんど同時にアスターを睨んだ。はいはい、と降参のポーズをしてアスターは引き下がり、代わりに犬耳青年に向こう直る。

「おいつれど。俺のかわいいリンちゃんが怯えてるんだけど、お前なんかしたのか？」

「お前の、じゃない」

おお、おれが言いたかったことをエドが代弁してくれた。「かわいい」のほうも否定してくれれば満点だつたんだけど。

「三日前にちょっと……。でもおれは俺の早とちりもあつてのことで、君を追う命令はもう出ていないから安心してください」

犬耳君は、前半はアスターに、後半はおれに向けてそう言い、最後には頬笑みまで付け加えた。髪と目は茶色なので派手さはないが、彼もまたさわやか系美青年だ。犬耳と犬尻尾はどう考へても余計だけど。しかし、なんだこの街、美形ばかりなのか？

「リンっていうんですか、君。俺はフレデリク。皆にはよくフレドと呼ばれていますから、君もそう呼んでください」

フレドはわざわざ床に膝をつき、おれと同じ田線になるようにして、未だエドの後ろから出てこられないおれに向かつて手を伸ばした。それを掴んでいいものか、迷つ。

「もう……追つかけてこないか？」

「ええ。あなたはもうエドガーさんのネコになつたわけですし、言つてゐる意味はよくわからないし、さり気なく聞き捨てならないことを言われた氣がする。だけど、いつまでも子供のように隠れているわけにもいかない。おれは彼の手に指先で触れた。フレドは嬉しそうに笑つて、つながつた手をぶんぶんと上下に振る。……握手か、これ？」

「うわー、俺、こんな近くでネコ見るの初めてなんです。かわいいなあ……」

フレドは相変わらずここにこじしている。で、この手はいつまでこうしてなきやいけないんでしょつか？

「主を出し抜いてリンちゃんと仲良くなるとは……フレドお前、なかなかやるな」

「人格の違いだろ、人格の。それよりフレド。お前はアスターを呼びに来たんじゃないのか？」

「ああ、そうでした！」

エドの指摘にフレドはよつやく立ち上がった。

「『主人様』。あなた隊長でしょ、隊長がそんなんでどうするんですか。部下に示しがつきません。それに、俺にも俺の仕事があるんですよ。今月何回目ですかこうやって勝手にお出かけになられるのは。そのたびに探しに行かれる俺の身にもなつてください。いいかげんにしていただかないと」

「あーわかった。わかつたからお説教はもうヤメテ。リンちゃんがすぐレジト目で見てるから」

株が下がる、とか言つてるけど、もともとあなたの株はおれの中で既に底値だから。これ以上下がりよづがないからね。

「早く帰れ」

エドがそつけなく付け加えた。

そういえばエドとアスターは一体どついつ関係なのだろう。城門の前で槍を持つて立つていたフレドは、きっと城勤めの兵隊さんだらうし、彼はアスターのことを「隊長」とも呼んでいた。アスター

もまた城壁の中で仕事をしているのだろうか。

帰り際、家の外からアスターの声がした。

エドは玄関口に立つていて、おれはナーナと一緒に廊下の奥に引つ込んでいたので、一人の声しか聞こえない。

「なあ、お前はいつまでこうしてるつもりなんだ？」

「俺はもうあそこに必要ないだろう？」

「だからって」

「フレドが待ってるぞ」

「……また来るよ」

二人の会話はそこで途絶えた。

ナーナが後ろ脚だけで立ち上がり、器用に前足で扉を開けた。ナーナすげえ。でも自分で扉を閉めたりはしないんだろうな。

連れられて入ったのはリビングルームと思しき場所。キッチンもそうだったし、おれが初めに目を覚ました場所もそうだが、広さはおれの家ととして変わらない。流石におれん家に暖炉はないけど。それに、全体的に物が大きめだ。このソファなんておれが横に五人は座れそうだし。

ナーナは暖炉前のカーペットに居場所を作ったみたいだ。

おれが恐る恐るソファに腰を沈めていると、エドが部屋に入ってくる。もうひとつの人掛けのソファに疲れたように凭れ込んだ。

「あの」

何が聞きたかった、というわけじゃない。しいて言えば何もかも、だ。

「……ああ。彼らのことかな。アスターはあれでも王都守備隊の隊長だ。フレドは王城警備隊所属。一人とも制服を着てたろ？」

「……王、都」

舌に馴染まないその言葉を、おれは慎重に口に乗せた。おれは、おれが聞きたいのは、そういうことだろうか。

おれたちはずから、長い長い話をした。

終わったころにはおれはもうへたくて……体力的にも、精神的にも。

あまりの内容に空腹まで忘れ、その日はもう何もする気にもならず、ソファに丸くなつてそのまま夜まで眠ってしまった。

2・ねこ、餌付けされる（5）

薄々そうじゃないかと思うことと、実際にそうだと突き付けられることの間には、思っていたよりも大きな差があつたようだ。

おれだつてあんなでっかいお城と中世ヨーロッパ的文明レベルを見て、ここがただのテーマパークだとその辺の外国だとか思つてわけじゃない。現実的なところで言えばおれの頭がどうにかなつたか、未だ夢の中にいるか。非現実的なところではタイムスリップとか……いろいろ想像はめぐらせた。ネコ耳とかイヌ耳とか、そのあたりはどうにも説明がつかない気は、していたけど。

彼の告げる国の名前、海の名前、大陸の名前、世界の話。すべてが耳に覚えのないものばかりだ。

「リンはどこの中から来たんだ？」

ネコ族、イヌ族といった半獣の人種は国には属さず、多くは國の外にある「里」と呼ばれる『ロニー』で生活しているといつ。

「……おれは人間だよ」

我ながら力のない声だつた。

「おれの耳はこんなじやなかつた。尻尾だつてなかつた。気が付いたらここにいたんだ。どこから来たわけでもない」

エドは曖昧な笑い方をした。多分、おれが言うことが信じられないんだ。そんなの、おれだつて同じだ。信じられない。信じたくない。

「でもリンの耳はこれだろ？」「…

おれの隣でソファが深く沈んだ。エドの手があれの頭に伸びる。おれは直前でそれを振り払つた。

パン、と思ったより大きな音がして、怯んだのはおれの方だつた。

「……今日はもう休みなさー」

おれはエドがどんな顔をしているかも知らず、彼に背を向けた。

ところが昨日の「」。

一晩寝て起きると、とにかく空腹が洒落にならないレベルで、うじづじ悩んでる場合じゃないうことに気がついた。

昨日のおれの態度を思い出すとちょっと恥ずかしくなる。いちいち他人の手にびくびくして、過剰反応基だし。エドはおれに優しくしてくれる人なのに。これじゃあまるで本当に獸になつたみたいだ。

エドと顔を合わせるのが気まずくて、どんな顔をしたらいいのかじぼやぼやしていると、扉からエドが顔を出した。

「おはよ。よく眠れた？」

「……おはよ、う。うん、眠れた」

エドはおれがどんな態度を取ろうと変わらない。優しいエドのままだった。おれは無意識にほっと息を吐きだした。

それからエドはままず、おれに湯を使わせた。そうこうや昨日もそのまま寝ちゃったし、おれ何日体洗つてないんだ？

西洋バスタブ式の、意外と近代的な風呂からあがると、ひどくすつきりした気分だ。やっぱり風呂は良い。脱衣所にはかなり大きめの上下が置いてあった。たぶんこれはエドの。体格差を思い知らされるよううでちよつと凹む。下着だけはおれのサイズだったのはよかつた。……もしかしてエドが買っててくれたんだろうか。

廊下に出ると、昨日と同じようにキッチンからいい匂いが漂っている。匂いだけはいいんだよなあ、匂いだけは。

「なんあんなにしようぱいんだらひ……」
いやきっと、昨日は味覚が敏感になつていただけで、今日は普通に食べれるはず

「……う」

ところがほしかなかつた。やつぱりしようぱい。

「……う」

今朝はサラダとポタージュのスープ、それに黒パン。エドが親切にもドレッシングをかけてくれたおかげで、サラダすらまともに食べられない。ドレッシングのかかっていないところを慎重に選り分けて、そこだけ口に運ぶ。

スープはポタージュだつたせいか、昨日よりは塩気が少ない……様な気がする。それでもまだ塩辛い。せめてパンだけでもと思うのだが、このパン、すげー固い。歯が立たない。エドはナイフで器用にパンをスライスして、スープに浸して食べている。同じようにしようとナイフで格闘していると、なぜかちょっと焦った声で待つたをかけられた。

「俺がやるから……。ほら」

「あ、りがと」

一切れもらつた黒パンの厚切りを、端のほうだけスープに浸す。パンにポタージュがじわりと染み込んでふやける。美味しそうだ見た目だけは。

「…………ううう」

パンと一緒になら大丈夫かと思つたけど、やっぱり食べられなかつた。おれの味覚は一体どうなつちやつたんだ！？

パンを一口と、サラダを半分しか食べなかつたおれを、エドは心配そうな顔で見ていたが、おれは自分のことで精一杯でその表情には気がつかなかつた。

それから、おれと食との飽くなき戦いは始まつた。

昼前にエドが「出かけてくる」と言って家を出て行つた。これはチャンスだ。他人の家を家探しするのは気が引けるが、今はかまつてられない。

玄関の外から気配が消えるのを待つて、おれは早速キッチンに向かつた。材料はどこに置いてあるんだろう。流石に勝手に火を使うことはできないけど、というか、このでつかいコンロの使い方が

わからない、何が生で食べられるものへりこ……

「ない」

いつの間にかナーナが横にきて、「何やつてんの?」とこの風におれを覗き込んでいる。

「ナーナ、この家の食べ物、どこにあるの?」

「わふつ」

「えつ、おれの言つてるとわかったのー?」

ついてこい! とばかりに立ち上がったナーナに、おれはちょっとびっくりしながらも後に続く。どこに行くのかと思えば、ナーナはすぐに立ち止まつた。食器棚の前で。

一番下の段の、両開きの棚を開けると、やけに大きな

「うん、そんなことだと思ったけど」「ナーナの餌が入つっていましたとさ。」

毎週金曜日Hドが帰つてきたので、おれは思い切つて提案してみた。

「あの、毎週飯、おれが作る……」

「え? リンが?」

大きく頷く。さあ、「頼む」と言つてくれ。おれの食生活が、いや、おれの命がかかつているんだ。

Hドは少し考えた後、はっとおれを見て、ぽんぽんと優しく頭を撫でた。

「いいんだよリン。お前は何もしなくて、気を使つてくれてありが

とう

「ううえ?」

「お前はやさしい子だね」

上機嫌こまな板に向かつHド。……あれ、おれの申し出せじつなつたの?

どうやらHドおれが西候の身であることを気に病んで、自ら家事の手伝いを申し出たと思ったらしい。「ごめんエド! そんな殊勝な心がけから出した言葉じゃないんだ! だからそんな、おれから飯

を奪つねつない」と……

「…………」

やつしておれの毎飯は抜きになつました。

2・ねこ、餌付けされる（6）

Hドが晝飯を作る途中、もう一度家探しを決行して材料のある場所は分かった。階段の裏側に地下室があつて、そこに野菜やら何やらを保存しているらしい。冷蔵庫の代わりってわけか。

午後はエドの田を盗んで、その地下倉庫へ続く蓋を開けてみようとしたんだけれど……これが重い。石でできた、あの体の大きなエドが通れるくらいの蓋だ。たたみ半畳くらいある。そりやあ重いだろうとは思つてたけど、まさか持ち上がらないとば。

「う、うう……」

「大丈夫か、リン」

結局食べ物を見つけることはできず、そればかりかおれはもう動く気力もなくなつて、ソファにつつ伏せに倒れこんだ。

昨日のソファは俺が寝転がつてもまだ上下に十分余裕がある。そこに半分腰掛けるようにして、エドが俺の顔を覗き込む。ナーナも鼻先だけソファの上に出した。こんな状態なのにカワイイとか思つちゃうおれ。結構余裕あるな。

「どこか具合が悪いのか？……薬を飲むにしても、何か食べないとな……。胃に優しいものでも作ろう」

立ち上がるうとするエドの服の裾を掴んで、おれは首を振つた。

「……いらないのか」

「いら、ない」

「でも、このままじゃ……死んでしまう」

エドの声は悲愴なまでに暗かつた。本当に、今にもおれが死んでしまうかのように。

人間つてそう簡単に死ぬのかな。たしかにご飯は食べれていない。腹が減つて動けない。でも一応、水分は補給してるし。サラダも半

分、食べたし。

「リン、リン。俺のことが嫌いか?」

おれはがんばって顔を上げた。うわ、この人、本当に泣きそうな顔をしている。眉間にしわが寄つて、辛そうに細められた目じりにも皺ができる、ああ、美形が台無しだ。

そんな顔して、寄りに寄つて聞くことがそれかよ。

思わず笑つてしまつた。

「別に、嫌いじゃ、ないよ」

「じゃあなんで、俺の作った食事を食べようとしてしない」

「それは……」

食べたもんじゃないから、なんて言つたら、それこそこの人のほうが死んじゃいそうだ。

「……小食なんだ」

「嘘をつけ。食事の時いつも耳を寝かせている。それに、喉で唸つていただろう」

聞こえていたのか。それより、おれの知らないところで意思表示していた耳のほうが問題だ。

「本当だよ」

「リン、やつぱりお前」

カンカンカン、と昨日も聞いたドアノックカーの音がした。

「たーのもーう!」

「ご主人様、ふざけないでください!」

「はいはい、と。おーいエード! いるんだろ、開けるー!」
スターとフレドだ。

リビングに入ってきた一人は、ソファに力なく倒れているおれを見て、やつぱり、と顔を見合せた。

「そんなこつたるうと思った。おーいリンちゃん、だいじょうぶー? 生きてるかー?」

「なにが……」

「おつと、お前の話は後。リンちゃん起きれるか？ 飯作ってきたけど、食える？」

「リン、大丈夫ですか？ ご主人様も俺も、気がつかなくて済みませんでした……」

アスターが体に触るうとしたので、それは気力で振り切った。代わりにフレドの手が伸びてくるので、それは甘んじて受けることにする。アスターがむすつと頬を膨らませた。

フレドに体を起こされると、目の前に小さな陶器の鍋があった。蓋を開けると、まだほんのり温かい白い粥のようなものが出てくる。優しい甘い匂いが鼻先をくすぐって、きゅうう、と腹が鳴る。

だけど、見掛けに騙されちゃいけない。これもきっとすゞくしおっぱいんだ。おれが首を振ると、アスターはもう一度「やっぱり」と呟いて、なぜかエドを睨んだ。

「お前がネコの飼い方なんて知ってる訳がないよなあ……」

これ見よがしに、溜息。

「リン、大丈夫、これはあなたも食べられます」

フレドがあれの口の前にスプーンを突き出す。おれは困つて、目でエドを探した。おれが誰を探したのかわかったのか、フレドがエドにスプーンを渡す。受け取つて一口食べ、エドは目を見開いた。それからもう一匙粥を掬い、今度はおれの口へ運ぶ。

「大丈夫だ。これは、大丈夫だから。……悪かつた、リン」

エドやフレド、アスターが、何を言つてゐのかわからない。だけど、なぜかおれは、フレドに差し出されても食べようとは思わなかつたものを、エドの手からなら食べてもいいかと思つたんだ。また塩辛い味しかしなくとも、それでもいいか、つて。

「……？！」

でも、それは美味しかつた。

程よい塩氣と、ミルクの甘み。砂糖も少し入つているみたいで、口の中が幸せになつた。

おれがもつと、と口を開くと、エドは文句の一つも言わず、それ

どこか嬉しそうな顔までをして、手ずからおれに食べさせてくれた。

「俺たちは人間よりも味覚が敏感なんです」

鍋の中を全部食べきつて、おれが満腹の溜息をついたのをきつかけに、フレドが切り出した。

「そうだったのか……」

エドはうなだれている。フレドみたいに耳と尻尾があれば、きっと両方これ以上なくへたつているはずだ。

おれはおれで、お前の味覚は人間と違うと言われて喜べるはずがない。それにしても、猫や犬って、むしろ味には鈍感なんじゃなかつたつけ？ やっぱり猫とネコ族、犬とイヌ族はまったく別個のものだつてことか？ ……それが分つたところで嬉しくはないけど。

「しかもなあエド。お前、自覚があつたかどうかは知らないけど……つづーかその様子じゃ自覚なかつたんだろうけど、お前はちょっと味付けの濃いものが好きすぎるんだ。塩辛いものとか辛いものとか、昔つからそうだつたよなあ……」

「俺は別に

「いくら俺たちの味覚が敏感だからといって、人間の食べ物を一切受け付けないほどじゃないですかね。ちょっと味付けが濃いなあってくらいで、俺どご主人様はおんなんじもの食べてますから」

……つていうか、あんただち同居してたのか。ご主人様、つて、フレドはアスターの使用人かなにかか？ でも、二人とも城で働いてるつて言つてたし……

「それはつまり、おれの味覚が鈍感だつてことか？」

「さつきからそう言つてる」

アスターにはつきり言い切られて、エドはなんだか体まで小さくなつてゐる気がする。その様子があんまりいたたまれないので、おれは思わず口を出した。

「あ、あの……。おれが言わなかつたのも悪かつたんだし……。味付けはその人の好みだから……」

三組の瞳がおれのほうを向く。いや、ナーナも入れれば四組か。

「リン、お前……」

「リンちゃん……」

「リン、君つて子は……」

「――カワイイつ――」

異口同音。

「う、うるせーこいつ」

トクン、と心臓が跳ねる。……えつ、なんで。

おれは耳をふさぐふりをして、跳ねた心臓の鼓動を必死で抱きしめていた。

男にかわいいって言われたって、いや、女のひとに言われてもビミョーだけど、とにかく嬉しくない。嬉しくなんかないはずなのに。スターにもフレドにも「カワイイ」って言われたけど、やっぱり全然嬉しくなかつた。それなのになんで今回だけこんなにドキドキしてるんだ、おれ！？

「リンちゃん、君の耳はそーじやないよー」

スターの言つてることがわかつてゐるのかわかつてないのか、ナーナが一拍遅れて「わふつ」と呟えた。

2・ねい、餌付けされる 了

2・ねこ、餌付けされる（6）（後書き）

3話は1/16頃更新予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2000j/>

このこねこのこ

2010年10月15日23時59分発行